【資料紹介】

宣長の宮地春樹宛書状について

日下幸男

一　はじめに

土佐藩教授館の宮地春樹（享保十三～天明五年〔一七二八～一七八五〕、五十八歳）は、晩年の天明二年に宣長に入門し、同五年に没している。宣長の指導を受けたのはわずか三年ほどである。年齢的には天明二年時点で宣長五十三歳、春樹五十五歳である。

『本居宣長全集』（筑摩書房版、以下『宣長全集』と称す）に春樹宛宣長書状二通が収められているので、宣長との交流の一端について知られる。また松阪の本居宣長記念館蔵宣長手沢本『冠辞考』の宣長書き入れに、春庭、大平等とともに宮地春樹の説が併せて記されている。

小篇では、最近架蔵となった春樹宛宣長書状一通を紹介したい。この一通は『宣長全集』には掲載されていないので、一応新出書状と見てよいかと思われる。

なお春樹の略伝については『宣長全集』第一七巻補注に、

> 宮地喜八郎春樹　通称喜八郎。為斎と号す。谷秦山（享保三年歿、五十六歳）門下で声名のあった静軒介行（宝暦三年没、八十歳）の次男。天明二年、宣長に入門。宣長に『万葉集』の疑問を質し、未定稿ながら『万葉集私考』（『日本古典全集』所収）がある。天明五年四月十一日歿、五十八歳。

とある。

二　既知の書状

宣長と春樹の交流がどのようなものであったのか、まず

既知の書状から見てみたい。『宣長全集』第一七巻「書簡集」の書状番号七六と一一九が春樹宛である。長文であるが、左に引用する。ただし書状漢文を訓読して示す（句読点、濁点を付す。見せ消ち等は訂正後の表記に従う）。

七六　天明三年五月十四日　宮地春樹宛

神奈川県川崎市　西郷信綱氏蔵

愚老著述の書ども、彼れ是れ御覧に入れ度き物ども多く御座候へども、千里をへだて、往来不便故能はず、残懐に存じ奉り候ふ。以上。

正月五日、二月廿三日、三月廿六日などの御状、追々相届き、拝見仕り候ふ。先ず以ていよいよ御安全の条、賀し奉り候ふ。愚老も旧により無事に罷り在り候ふ。慮外ながら、御遠念下されまじく候ふ。正月には念頭の御祝儀として白銀一包御恵み、忝なく祝領致し候ふ。

一、御問目、追々拝見仕り候ふ。此の度、三通の御返事を申し候ふ。今一通、此方に残り之れ有り候ふは、跡より御答へ申し上ぐべく候ふ。御不審の条々、いづれも御尤も成る御事とも存じ奉り候ふ。万葉集とにかくに脱誤など多く相見え、未詳の事ども多く御座候ふ。

尚、追々御考へ成らるべく候ふ。

一、古葉類聚抄の事、浪華のケンカ堂取り出だし申され候ふ由、此の書はいまだ見申さず候へども、噂は委しく承り及び申し候ふ処、さしたる事もなき物のよし、承り申し候ふ。

一、松陰日記の事、先年一見仕り候ふ。今世の婦人の筆には宜しく出来候ふ物に候ふ。去り乍ら、詞の誤りも多く之れ有り候ふ。いかさま柳沢家につかへたる京家の婦人の作にて候ふべし。

一、拙歌今風少々、仰せに任せ、御覧に入れ候ふ。

一、社中有力の人、御尋ねに御座候ふ。当地には一向出来申さず候ふ。先年少々之れ有り候ふも死亡いたし、今は稲掛重太大平と申す一人なり。此の人、万葉風の歌をよくよみ申し候ふ。其の中に、京大仏耳塚の長歌など、殊に宜しく候ふ。此の一首別紙に相認め、御覧に入れ候ふ。さて尾張の名古屋に田中庄兵衛道麻呂と申すあり。是れは名古屋中にての先生にて、門人多く古風の学よろし。石見国浜田侯の文学小篠道仲（ママ）と申す。是れは元来儒者なり。近来皇朝の学、甚だ出精にて、彼の地にて門人多し。右の人々、みな愚老の門人にて御座候ふ。其の外、さのみ申し出づべきほどの人も出

来申さず候ふ。尚、後信を期す。早々。恐惶謹言

本居宣長

五月十四日

宮地喜八郎様

とある。この書状の内容については『宣長全集』の補注に詳しいが、ここに繰り返す暇がない。ついて見られたい。

この書状の要点をまとめると次のようになろうか。

（一）年頭の祝儀をありがたく頂戴する。

（二）一月から三月までの三通の返事はここに、後の一通の返事は後日に。

（三）万葉集は誤脱が多く、未詳の事も多い。古葉類聚抄は未見であるが、さしたる物ではないと聞く。松陰日記は女性の筆としては良くできているが、詞の誤りが多い。

（四）最近の自詠を御覧に入れる。

（五）有力な門人は先年死亡し、今は稲掛大平一人である。ほかに尾張名古屋の田中道麻呂、石見浜田の小篠敏がいる。

三通の質問に一度に答えているので、雑多な印象であるが、丁寧には答えている。春樹の要望は、一応満たされたものと思われる。次にもう一通を示す。

一一九　天明某年十二月廿五日　宮地春樹宛

奥山宇七編『本居宣長翁書簡集』所載

一筆啓上仕り候ふ。厳寒の節、いよいよ御安全御座成られ候ふ哉、承り度く存じ奉り候ふ。愚老旧により罷り在り候ふ。慮外ながら御安情下さるべく候ふ。追々御疑問拝見仕り候ふ。御考ども御尤も成る義多く、珍重仕り候ふ。此の度の一通に御答へ申し候ふ。残り一通は、来春御返事申すべく候ふ。殊の外、月迫り仕り候ふ。猶ほ来春目出度く貴意を得て、冗を紛らすべし。草々。恐惶謹言。

本居宣長

十二月廿五日

宮地喜八郎様

とある。宮地は天明二年入門、五年四月没なので、本状は天明四年以前のものであろうが、定型文と思われる文言の調子などから見ると、日の浅い天明二年のものであろうか。

三　架蔵の書状

架蔵の天明四年十一月十七日の宮地喜八郎春樹宛宣長書状について、まず書誌を簡略に示す。木箱入り、紙本軸装一幅。総丈縦一一五・〇×横四七・五センチメートル。本紙縦二九・四×横四〇・七センチメートル（もと折紙を切断し、天地の方向を合わせて上下二段につなげたものと思われる）。料紙は少し色が茶色がかっているが、楮紙か。

次ぎに本文を忠実に左に写す（句読点を付す）。

九月廿三日之御状相達、
拝見仕候。此節寒冷
相増申候へ共、愈御平安
御座被成候哉、承度奉存候。
愚老依旧罷在候。乍
慮外、御遠念被下間敷候。
一、御問目壱通御返答申候。
御厚志之御事故、随分
委細ニ御返事申候。尚又
御不審之御事ハ幾度ニ而も
押返し御尋可被成候。労ハ
少しもいとひ不申候。何分
御出精、所希候。
一、愚作真暦考、国号
考ハいまた板行ニ及不申候。
漢字三音考ハ来春
梓行可仕候。真暦考之
趣ハ、神代より天地自
然之暦ニ任スト、外国之」（上段）
暦を用ルとの論也。
日本紀ニツキテ、此論必
入用ニ候也。紀を御覧被成候而、
御不審ハ無之哉、御考
可被成候。
一、国号考之義、わつか一冊
之物ニ御座候へハ、御覧被成
度候ハヽ、京都酒井氏迄
愚本さし出し（「入御覧」を墨消）可申哉。書
状とハ違候故、京都之所
いかヽ不存候而、押而ハ得出シ
不申候。もし酒井氏へ向ケ
出し申候而も、宜御座候ハヽ、
今一往、其旨可被仰聞候。

何時ニ而も、入御覧可申候。
尚期後信。恐惶謹言
本居宣長
十一月十七日
宮地喜八郎様
尚ゝ御問目、今一通ハ跡より
御返事可申候。以上」（下段）

とある。中に宣長著作に関する記述が見られる。これを出版順に並べると、

漢字三音考　一冊　天明五年仲春
国号考　一冊　天明七年秋
真暦考　一冊　天明九年春

となる（日下幸男編『中野本・宣長本刊記集成』〈龍谷大学日下研究室、平成十六年〉）。「漢字三音考ハ来春梓行可仕候」とあるので、本状は天明四年のものと思われる。

本状の要点をまとめると、次のようになろう。

（一）九月の御状の御質問に委細に返答しますが、御不審の点は何度でもお尋ね下さい。

（二）真暦考、国号考は未刊であり、漢字三音考は来春梓行予定です。

（三）真暦考は、自然暦か外国暦か、いずれを用いるべきかの論であり、日本紀を御覧下さい。

（四）国号考は一冊ものですので、御覧になられたい時は、京都の酒井氏迄お送りします。それでよろしければ再度お申しつけ下さい。

（五）もう一通のご質問の御返事は後日に。

ポイントは宣長自著についての記述である。宣長著作についての記述は他の宣長書状にも見られ、さまで両者の関係に新発見をもたらすものとも言えないだろうが、出版前の著作の内容について紹介しており、写本の貸出を申し出ていることからすれば、両者の信頼関係を見て取ることはできるであろう。

以上をもって紹介の筆を置く。

（本学教授）